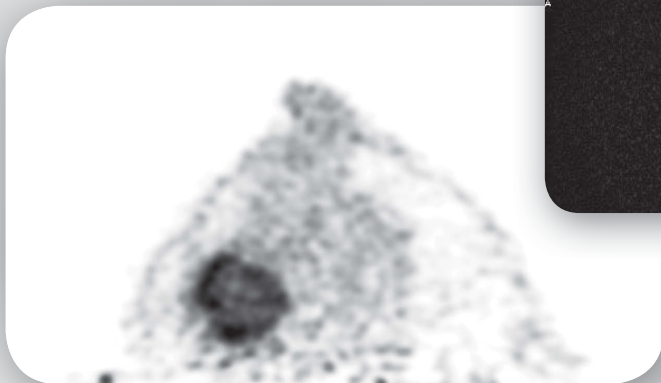
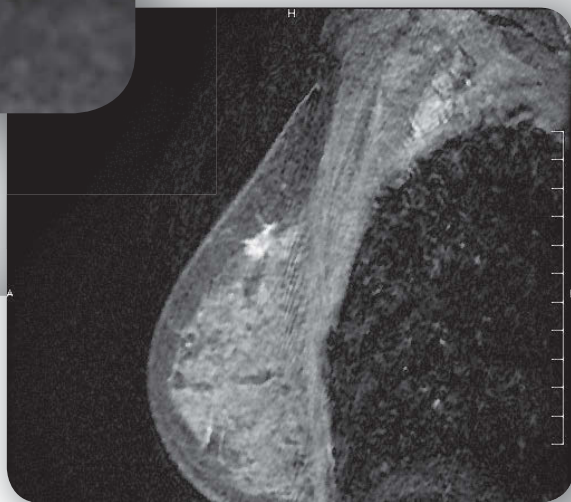
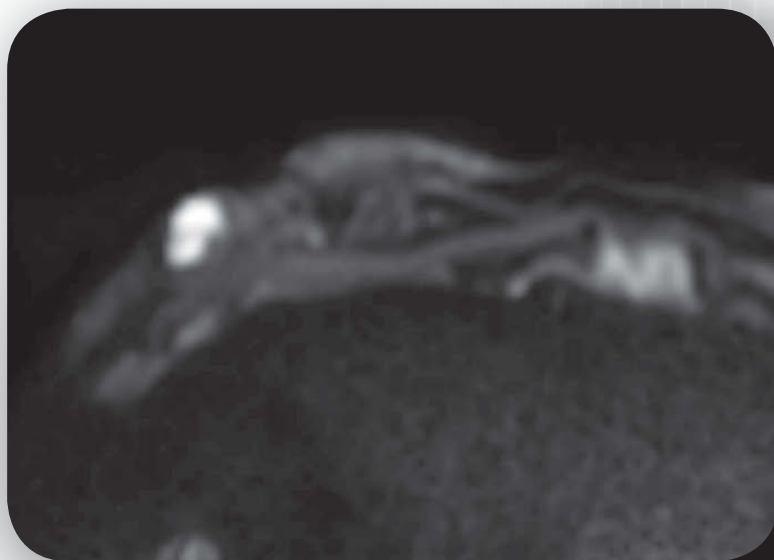


特 集

乳房画像診断：



(写真：p1035, 1067, 1101より)

MRIとPET

序説

筆者が、乳房の画像診断に興味をもつようになって20年以上の時がたつ。始めたころは、ルーペを片手にシャウカステンに向かってマンモグラフィの読影を学び、また、大きなプローブを持って超音波検査に日々挑んでいた。当時は、乳房温存療法が徐々に一般化されるようになってきた時代で、造影MRIによる術前の広がり診断への注目が大きかった。乳癌関係の学会や研究会に行くと、トピックはMRIのセッションで、外科医も放射線科医もこぞって集まり、盛り上がっていたのを記憶している。

その後、乳癌の診療は薬物療法の発達に伴い、個別化治療がかかげられるようになり、バイオロジーや、さらには、ゲノムといった時代になりつつある。これに併走するように、画像診断においても、形態的診断だけではなく、血流情報やさまざまなバイオロジーを探索するようになり、MRIやPETがこれらを担うようになった。

しかし、一方では、いまだスクリーニングにおいてはマンモグラフィや超音波検査といった形態診断が主であり、現在でもわが国でのMRIの主目的である術前の広がり診断では、形態的要素が診断に占める部分が多い。形態は外見かもしれないが、筆者は、これもバイオロジーの表現型の1つと考える。

比較が適切ではないかもしれないが、人の顔が年を重ねるごとに、その内面によって作られていくのと同じで、画像の形態診断にも同じものを感じる。そんな思いを抱きながら、今回、乳房のMRIとPETによる画像診断を特集させていただいた。いずれの検査もバイオロジーと形態を重ね、これを組み合わせて病変の本態に迫るモダリティである。

今回は、その道の専門の先生方に加え、新進気鋭の若手乳房画像診断医にも執筆に加わっていただき、活気溢れるフレッシュな内容となっていると自負している。併せて、忙しいなか執筆を快諾いただいた著者の先生方に、この場を借りて深謝申しあげる。この特集を読んで、少しでも未来への乳房の画像診断に興味をもっていただける読者がいればと思う。

佐竹弘子